

杉山 博昭（京都大学大学院）

本論は15世紀のフィレンツェで上演された聖史劇を手がかりとして「同時代の図像に何が起きているのか」を検証するものである。特定の図像の成立要因、つまり「身振りのコード」などを典礼劇に探し求めた美術史上の試みは、一部の例外を除くと大きな成功を見ていないと言える。シャピローやバクサンダールの指摘にもあるように、演劇から図像へという一方通行の即応関係を「実証的」に証明することは困難である。しかし図像の源泉を求める作業への拘泥を留保した上で再構成が進む聖史劇の研究成果をふまえるならば、「反復」され「再演」されるものとしての図像資料の新たな側面が明らかになるだろう。

まず、絵画的リアリティから逸脱したスペクタクル性が横溢する図像に注目する。例えば、廃墟となった異教世界の建築物を背景に描かれる聖母子の図像と、降誕劇の一種『皇帝オクタヴィアヌス』の演出を照合することは興味深い。広場に並べられた山車を舞台装置として、雷鳴の音響とともに古代ローマの神殿が崩れ去り、皇帝と巫女が体験する幻視としてそこから聖母子の姿が現れる演出は実際に存在したのである。ダミッシュが指摘したケースも、これに合わせて考えたい。つまりマンテーニャの図像の内に聖史劇『昇天』の演出が反復されているのである。演劇的リアリティが混在するこれらの図像は当時の聖史劇の反復 / 再演として、鑑賞者の眼差しの承認を受けた可能性は極めて大きいと言える。

さらに、鑑賞者の視線を大きく転換させる図像を取り上げる。短縮遠近法や仰視遠近法として分類される技法を用いて描かれた図像は、単に遠近法についての理論の延長、実践のみを成立要因に持つわけではない。当時の鑑賞者は、実際に同様のアングルで対象を眺めることを強く要請されたことは、聖史劇『受胎告知』などで内陣障壁上に設置された舞台や演者の空中浮動を伴う演出からもはや明らかである。また、プレデッラやカッソーネに描かれた図像が鑑賞者の眼差しを水平に誘導する点もまた、ひとつの反復の契機である。『マギの礼拝』などのハイライトでもあるページェントは、まさしく観客の視線を誘導し、時には観客自身の位置を移動させてきたのである。不動の消失点に正対しあまねく事物を射抜く傲然たる眼差しとは異質の、圧迫を受け揺れ動かされる不安定な眼差しのなかでも、図像は反復 / 再演を続けたのだ。

そして、図像に描かれた超常的な光、もしくは点光源に注目する。教会堂内で上演された演目、例えば『聖霊降臨祭』などでは明滅するイルミネーションや炸裂する光芒といった舞台効果が、ランプや花火を用いた仕掛けによって実現された。図像資料に確認される、天上に鎮座する神に施された装飾、さらにはマンドルラなどの描写は、まさしく、これらのランプや花火のそれに近いように思われる。また聖史劇のテキスト内に頻出する光と影の象徴的な価値を説く台詞は、図像内に描かれた光を当時の鑑賞者がいかに受け止められたかを、推し量る一助ともなるであろう。

近年、聖史劇の上演台本として同定されたテキストの読解は、演出と台詞の両面から図像の一側面を、つまり反復 / 再演される図像の性格にスポットを当てるだろう。